

お講

「講」とは仏教の教義、經典を教え広めるための集會を「講」と呼んだ。村落独自の団結の持つ複雑多様な性格を持つ講であるが、地縁性の濃厚な性格で宗派を問わない、土地の風俗慣習行事として土着化して根付いていた。

真宗門徒にとつて報恩講は一年中でもっとも大切で、親しみ深い行事であり、浄土真宗の御教えを明らかにしてくださ

った宗祖・親鸞聖人の法要です。本願寺三世覚如が、親鸞の三十三回忌に「報恩講私記(式)」

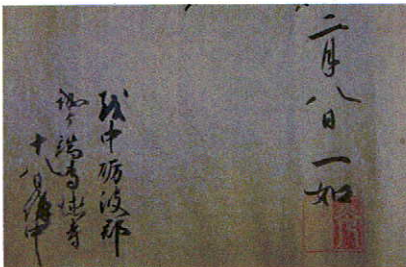


を撰述した事が起源であるとされる。古くは、親鸞聖人が関東の稲田の草庵で、門徒衆が相集い、読経、説教聴聞のあと、そろつて「お齋」をいただいたことが儀式化されたものであるか。

御消息

真宗門徒にとつて、本山・法主(ほつす)はすべての権威の源泉であり、法主からの御消息は目に見える権威の象徴であった。御消息は本山より下付され、各集落における人々の心の「大事」として講などで拝読されてきた。金戸にはこうした御消息は多く、現在江戸時代の三通、明治年代の一通、昭和年代の二通が残されている。

御消息でも蓮如のものは「御文(おふみ)」と呼ぶ。一般に消息は法義勸化や意義を糾明する「法語消息」・中世からみられる「懇志請取消息」・本山や御坊の堂宇再興のための募金を旨とした「募化消息」とその謝礼を述べた「再興成就消息」・本山・御坊に功績のあった人物や講に対して出す「感賞消息」に分けられる。



御消息の多さはそれだけ講が機能(活動)していたことの証であり、集落をまとまりとして信仰が広く生活に根をおろしていたともいえる。

最も古いものは東本願寺第十六代法主(延宝七年一六七九に継承す)一如の法語消息である。

次に古いのは宝暦一〇年(一七六〇)第十九代法主を継承した乗如の法語消息である。

堂宇再興のための募金を旨とした募化消息として達如の消息がある。全国的に多く現存しており文化五年(一八一三)本山焼失による再建のための勸化のためであった。達如消息は内容的にはまったく同一である。



四通目は弘化三年(一八四六)父・達如が隠退により第二十一代法主を継承した巖如の消息で、現如に法主を譲り退隠した明治二二年(一八八九)二月五日付の消息である。

講の意義は弥陀の本願に対して同一の信心を持つものが、一つの場所に集まってお互いの信心をうちあけあい、それによって各自の信心をより一段と深めあう寄合の組織であった。

講は普通夜に行われ、「正信偈」を

勤め参加者が唱和した。その後「御文」

「消息」を拝読して説教となる。講は個人

の信仰の場であるとともに、社交の場

(コミュニケーションの場)として、世間話をして地域での人間関係形成に大きな役割を持っていた。

講の宛先をみると専徳寺一人講中・一四中講であり、講の寄合日の名称を記したものは中世的な古い溝であるといわれている。寺院を介するのは本山の教義・信仰と門徒に取り次ぎ、講

による募財を本山に納める役割を寺院が担っていた証である。

それに対して達如の金戸本山十日講中という本山講は寺院を介さない直接本山(法主)に結びついたものであり、手次寺との関係を越えた広い範囲で結ばれた講であったことになる。

金戸公民館在の厳如消息は別院の取り持ちに重きを置いたものとなっている。村落(共同体)の機能が別院を通して本山に組み込まれたことになる。



### 尼 講

講には坊守講中・若講・女房講中・

尼入志講衆・尼講中など講の構成員から名づけた講が藩政時代からあった。

婦人団体の始まりといえる「尼講」は、仏教諸宗諸派の各寺院を中心として存在していた。金戸には芋を績みながら語り合いを楽しみとする「芋運座(おうらんど)」があった。やがて定期的に集まり僧を招き仏法を聞く「御座」となった。村々の女たちがそれぞれの家を持ち回りとし麻糸を紡ぎ、その収入から一厘ないし二厘を尼講費として、東西本願寺に喜捨していた。後にその若干を拠出し合い、集まった金数をくじ引きで当たった人が生活の足しにする頼母子講的尼講も存在するようになったという。このような庶民的な婦人団体や婦人集會が明治末期まで盛大に行われていた。

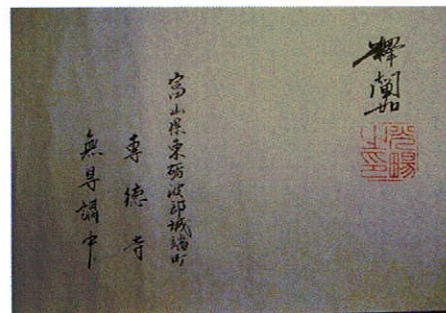
大正中期以後に漸く地方の自主的意図に基づく婦人會の芽生えが見られるようになったが、その運営や事務は役員や教員に委ねられていた。

一方寺院は明治二〇年頃、当時の東本願寺門首であった現如上人がヨーロッパへ視察旅行に行かれ、イギリス・フランスのキリスト教会における婦人活動をご覧になり、東本願寺宗門にも

婦人會を持ちたいと考えられ、帰国早々の明治二三年(一八九〇)に「大谷派婦人法話會」(大谷婦人會の前身)を結成された。金戸も城端別院の元で大谷婦人會が結成され、いち早く婦人団体としての活動があった。

五通目は専徳寺が戦時に中断していた尼講を昭和五年に無碍講として會員六四名で新たに再結成されたものである。

毎年二月の報恩講・追悼會をはじめ県外の研修會、竹の子料理會、正信偈聲明講習などを続けてい



### 歴代会長

丸山かね	昭和53年
松田千鳥	昭和56年
広田みさを	昭和63年
島島三千代	平成2年
東頭寿美子	平成9年
上田顕子	平成17年
盛田美代子	平成20年
西江佐代子	平成21年
広田信子	平成24年